

現代の台湾から考える日本

—台日関係を描く台湾映画に台湾アイデンティティを求めて—

Taiwan Identity Through The Movies Related Between Taiwan and Japan

三輪 昭子 Shoko MIWA

概要

「一つの台湾・一つの中国」というスローガンがある。これは、2015年11月7日、台北の総統府前で掲げられていたもので、中台首脳会談に抗議するデモ参加者が強く打ち出したものでもある。他方で、「一つの中国」と言われていても、これまでのオリンピックでの入場シーンを観ていると、中国は People's Republic of China で、いわゆる台湾は Chinese Taipei と明確に2種類の存在がある。

中国の言説によれば、現在も「台湾は中国の一部」と言われているが、台湾は中国の一部なのだろうか。それを強く否定する「台湾人である自覚」、あるいは「台湾人のアイデンティティ」は、どのように形成されてきたのか。そして、台湾は以前より多民族多文化の地域とされてきた。台湾人とは、誰なのだろうか。

本稿はアイデンティティ形成に強く関与するのが教育であると考え、まず教育からアイデンティティの形成について考え、またアイデンティティ形成が社会にどのように投影されているのかを台湾映画で読み解くことで考察する。

キーワード

一つの台湾・一つの中国
日本統治時代
台湾アイデンティティ
社会参加宗教
多文化・多民族
国片映画

目次

- 1 はじめに
- 2 台湾における教育史
- 3 台湾映画が示唆するもの
- 4 台湾人とは誰か
- 5 日台関係～終わりに代えて

1 はじめに

2015年8月、愛知学泉大学と提携校となっている慈済技術学院⁽¹⁾が主催するサマープログラム (Service Learning, Humanities & Transcultural Program ; SLHTP, 以下 SLHTP) に参加する学生

たちの引率業務のため、台湾は花蓮という台湾島の東部に位置する地に約2週間の滞在をした。これは、筆者にとって2度目の台湾であった。

最初の滞在は日本語教育の仕事に携わっている頃で、元同僚の友人を頼っての台北と台南への旅。当

時の筆者の勤務先は専門学校の日本語学科の部署で、教務的業務とカリキュラム開発などの仕事に従事していた。時に、学生募集に関わることもあった。

台湾旅行の同行者の元同僚は日本語講師として勤務していた関係で、台湾に職を求めた学友が数人いた。その彼女らとの再会を目指した旅でもあった。

その日本語教育の部署には学生募集のために台湾事務所があった。その事務所に勤務する方々が旅の支援をしてくれたので、価値ある時間を過ごすことができた。その後、筆者は異動で東京の事業所勤務となった。当時、日本留学の経歴を持つ台湾出身者が同僚の一人となるなど、台湾ゆかりの情報や人々が私自身の台湾に関するイメージや価値を形成することとなった。

それだけではない。ここ 10 数年、映画を媒介にしてさまざまな学びを経験してきた。アジア映画、特に中国・香港・台湾由来の映画鑑賞を通じての文化情報だけでなく、その国が持っている歴史や日本との関係性まで考える材料に富んでいた。

本稿は、直接のきっかけは 2 度目の台湾旅行として花蓮に出かけたことに由来するが、これまで漠として持っていた台湾についてのイメージについて、台湾人としてのアイデンティティを軸として論ずるものである。それは、これまでの筆者自身が学び得てきたことを再整理することでもある。

その再整理のために、まず教育という分野に注目する。アイデンティティ形成には教育の力が大きく影響するからである。また、歴史の力も大きい。台湾は、中国大陆から移り住んできた過去と、日本が植民地として統治された過去を持っている。

その後、台湾映画に着目する。台湾人自身が制作した映画には台湾人としての何かが語られているに違いないからである。この点に関しては後述する。さらに、台湾について考えるためには、昨今の中国との関係性に触れなければならない。

以上のような過程を通じて本稿を進め、台湾という地域、あるいは台湾人のアイデンティティについて何らかの整理と考察を述べる。

2 台湾における教育史

教育は国の礎をつくる営為である。教育内容を知り、想像力を働かせれば、その国の行く末が分かるように思われる。また、学校教育における歴史教育や言語教育は、近代国家（国民国家）がその構成員に対して一定の国民意識を要求するものであるから、

教育のありようを知ることで、その地域の人々のアイデンティティがわかる。

ここでは、教育内容を時間的経緯にしたがって述べることで、アイデンティティの行方や変容を時代とともに考えたい。

2.1 慈濟技術学院の提供するもの

（1）SLHTP とは

慈濟技術学院（以下、慈濟）が提供しているプログラム、SLHTP は、何よりも「mutual interaction（相互に影響を与え合うこと）」を主たる目的としている。このプログラムに参加するのは、各地域（2015 年度は英国、中国、タイ、マレーシア、日本）からの様々な異集団のメンバーたち、受け入れ校である慈濟の学生を含めた 100 余名で、その参加者たちが互いに働きあい、善き関係性を築くことができるよう企図されたものである。

英語をツールとして様々な文化、サービス・ラーニング、人文学に関わる内容が教授される。文化は社会的行動の基礎となる共有価値を成り立たせるような思想、アイデア、信条、価値、そして知識とみなす。サービス・ラーニングを多文化コミュニティへの関わり、学術的科目、スキル、価値を通じて教授されるメソッドとみなす。さらに、人文学を人類として高次の質を保たれるものとみなす。この科学は、様々な例や説明、助言環境、経験、期待が与えられることによって高められ、教養となっていくものである。

以上のような大枠の説明には、プログラムの目的が示されていて、①多文化の違いと力学を理解し、尊重すること、②自省的で文化受容を促すこと、③コミュニケーションスキルを生かし、問題解決に努めること、④人文学の定義と重要性を理解すること、⑤サービス・ラーニングを通じて自分自身の価値や、セルフエスティーム（自尊感情）を強化すること、⑥奉仕と利他の価値を高めること、となっている。

（2）財団の存在

慈濟は「財団法人台湾仏教慈濟慈善事業基金会」という慈善事業のための財団を持っていて、それは 1966 年に證嚴上人によって台湾の花蓮県で創立された⁽²⁾。台湾を拠点にして、広く世界に視野をおいた慈善団体であり、40 余年来台湾において、医療、建設、教育建設、社会文化などの事業で社会のために力を尽くしてきたという。

慈済は、慈善、医療、教育、人文の四項目を「四大志業」と称し、他に骨髓バンク、環境保護、地域ボランティア、国際救済を加え、同時にこの8項目が推し進められるので、これを「一步八脚印」（一歩歩けば八つの足跡ができる）と称した。

慈済の経費は全て民間によるもので、ボランティアもまた各分野の主要な執行者である。したがって、善財の使用は最も良い監督の下で使用していることになるので、国内外の人々から信頼と支持を得ている。

1985 年各国にいる慈済人は慈済事業を海外へ広め、現地の愛の心を凝集して、救済活動などの仕事を推し進めてきた。現在 38 ヶ国に慈済の拠点がある。1991 年バングラデッシュ洪水被害の大変な被害を助けるために、慈済は海外救援の仕事に踏み出した。2005 年初めまでには、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカ、オセアニアなどの世界で合計 57 ヶ国を援助した。

生命の尊重、人間性の肯定に基づいて、慈済は人道精神で援助活動を行い、政治、人種、宗教及び地域を越えて、被災地で必要があれば、そして慈済の能力が及ぶ限り、全力を尽くして禍の苦しみの最中にいる人々に生きる希望を与える。凍りつくような北極圏から耐え難いほどの酷暑の熱帯地区まで、慈済のボランティアは遠路を拒まず、山を越え、海を越え、疫病や戦乱の危険をも顧みず、「どんな困難でも乗り越えられる」という信念を抱いて、次から次へと困難な任務に従事してきたのである。そして物資の援助以外に、被災者に互いに助け合い、愛することを促し、被災地の自立再建を推し進めている。

（3）サービス・ラーニング

サービス・ラーニングとは、「教室で学ばれた学問的な知識・技能を、地域社会の諸課題を解決するために組織された社会的活動に生かすことを通して、市民的責任や社会的役割を感じ取ってもらうことを目的とした教育方法」と、定義⁽³⁾される。

さらに、専門教育を通して獲得された専門的な知識・技能は、社会的活動の中で実際に活用されることで、現実社会で実際に活用できる知識・技能へと変化を遂げるとしている。

一方、慈済での SLHTP でのプログラム概要では、「サービス・ラーニングは、多文化コミュニティへの関与、教室内で学ぶ学問的科目、スキル、価値を活用する方法である」とする。

そこで思い出されるのが、慈済が慈善財団として活動していることである。そして、台湾の宗教社会現象に対する研究枠組みとして注目されているものに、慈済会を「社会参加仏教」として捉えるアプローチがある。これは、「仏教は出家を重視するがゆえに社会参加のための倫理を提供することができないと思われてきたことに対し、出家を重視せず積極的に社会貢献を行う仏教教団を、社会参加宗教と捉えるもの」である⁽⁴⁾。

おそらくこれは、慈済財団が積極的に各地の被災地に出かけ、公共的な災害支援を担う活動に色濃く現れている。同時に、宗教教団として拡大し、世俗化していくためには社会的支援活動をすることで、その存在価値を高めていこうという動きと軌を一にしている。

2.2 郷土教育

郷土教育と言えば、日本の昭和期に郷土教育論が活発に行われた。その背景には、世界恐慌などの影響による農村窮乏化への救済という問題意識があり、恐慌により疲弊した農村を立て直す自力更生の精神を生み育む方法として主張された。それは、やがて郷土愛を育むよりも祖国愛を涵養することを主たる目的とするようになった。

台湾の郷土教育は歴史教育と言語教育の両方を含んだ形で 1990 年頃から盛んになった。林初梅(2009)によれば、世界の多くの国で取り入れられている郷土教育は国民創出をねらいとしたもので、その多くを身近な生活・社会・自然を教えようという方向性がある中で、台湾の場合のそれは歴史と言語という二つの面をもつという点で特殊性を持つとされた。それは、大中華主義の支配によって台湾人アイデンティティが危機に見舞われている現実があるからだ。

もともと台湾は古くから多文化・多民族社会であった。有史以前からこの島にいた南島系諸民族は「原住民」と呼ばれ、人口の 2%ほどを占める。17 世紀以降に大陸から移住し始めた漢人は、一括して「本省人」と呼ばれ、1945 年以降に国民党政権とともに来台した人々は「外省人」という⁽⁵⁾このような複雑な民族構成は台湾に多言語混在の状況をもたらした。

他方で、入れ代わり立ち代わり外来政権の統治を受けた。17 世紀にオランダ東インド会社は台南に拠点を築き、ほぼ同時期に台湾北部へ来ていたス페이

ン人を追い出す。その後、明朝復興を志す鄭成功が清朝への反撃基地として台湾に注目し、オランダ東インド会社から奪取した。鄭氏政権はやがて清朝に降伏したが、日清戦争後に結ばれた下関条約により今度は日本に割譲されている。

1895年から台湾は日本に領有化された。その結果、文化の様態が複雑化した。日本語が台湾人の「国語」として登場し、事実上の共通語として普及し、さらに同化・皇民化政策が進められた。この時期に行われた教育、すなわち国語教育については、次の項に譲ることにし、先を進める。

その後、1945年の日本敗戦により台湾が中国大陆から来た国民党政府に接收されたことで、さらに複雑化した。中国語が導入されたが、それは台湾に根がなく、導入された文化もまた従来からの原住民文化ともかなり異なるものであった。そんな中で、「一言語・一文化・一民族」の教育政策は長年ずっと台湾の中で機能していて、戦後は1987年まで「中国の領土である」という立場から中国の歴史を子どもたちに教え、台湾自身の文化や歴史について語られる教材は僅かしかなかったのである⁽⁶⁾。

郷土教育の提唱は、従来の中国に偏っていた教育内容から抜け出そうとしたことが背景にあったが、当然のことのように「台湾史を国史へ」という動きだけでなく、台湾諸語教育は2001年以降、「郷土言語の必修化」という形で推進されるようになった。しかしながら、それが制度化されようとした1994年前後において郷土教育とは何か、郷土とは何かということが大きな焦点になり、その後は教育内容の問題点が露出し、郷土の定義もままならない状態の中で、最も大きな論点のひとつは「台湾というナショナル・アイデンティティ」がどのように構築されるのか、という問題であった。

そもそも台湾には、閩南（みんなん、中国大陆福建省南部の発祥）文化、客家（はっか、中国大陆広東省の発祥）文化、原住民文化、外省人の中華文化を基盤にした四大エスニック集団がある。既述では、閩南、客家を一括して中国大陆から移住した漢人としてのくくりで本省人としている。それぞれが違う歴史的体験があり、複数文化に由来する多元的な性格を持っている。したがって、いくつかのアイデンティティが台湾人の間で併存、あるいは個人の意識内部で重層化・複合化していることは十分に考えられる。さらに、そういったアイデンティティは、時代とともに変化するだけでなく、地域や国際関係の

変化に応じて変化することも考えられる。

そういった状況下にあるので、台湾人のアイデンティティは常に変化するもの、多元的でありうるものとして時代状況の中でとらえていくのが賢明のように思われる。

2.3 日本統治下の国語教育

（1）統治期の期数ごとの概観

1989年、台湾人向けの初等教育機関公学校が設立された。台湾公学校用の国語読本は、台湾総督府により、1901年から1945年までの45年間、第5期に渡って編纂された。第一期の1901年、第2期の1913年、第3期の1923年、第4期の1937年、第5期が1942年から1945年となっている。それぞれの期間では公学校用国民読本という名称の教科書で、その内容は各期において若干の特徴がある。

まず第1期は、その内容を日本政府は民智開化と新領土国民の養成を考えて、国家精神や科学知識を重要視し、教材配分には「実学教育」の割合を他の教材より多くした。これは、植民地台湾で最初の国語教科書であったし、日本の領土になったばかりの台湾は生活レベルや環境条件も低い状態であったため、読本の挿絵に描かれた人物や内容には日本と台湾の文化上の違いが明らかに見える⁽⁷⁾。

第2期は、日本は日露戦争後の社会経済の発展があったため、植民地での人力開発が主務となったので国民読本の編纂形式は日本の本土とほぼ同じとなり、これまで台湾と日本との違いを強調することは徐々になくなった。

第3期は、第一世界大戦後、大正デモクラシーの影響があり、台湾教育令が1919年に公布され、台湾の学制が完備。台湾人からの教育機会の増加を要請する動きも出てきた。この時期の教材の構成は、実学知識や台湾郷土教材や国民精神の涵養がポイントとされている。加えて西洋に関する教材（発明物や人物）が現れるようになった。

昭和期（第4期、第5期）の台湾における台湾人への日本語教育において、一般民衆や未就学青少年を対象とした国語講習所の大量設立や、「国語普及10ヶ年計画」などの普及活動が実施され、台湾人の国語理解率を引き上げようという動きがあった。

（2）昭和期の教材構成

公学校の教科には修身科があるので、道徳教育は修身科を通して行われるのが基本であったが、表1

の分類表にあるように、道徳関係の教材はあった。

修身科ではなく、総合的な読本としての役割を持っている国語読本であって、道徳教材は入っていても強調されていたわけではなかった。個人の徳性が国民精神や国への奉公とつながり、皇国民精神教材に結びつけられていた。

その影響で、実学教材の分量が減っていき、採用された教材は国家の時勢に合わせ、統治や戦争に有利なものしか取り入れられなかった。

皇国民精神教材は直接に日の丸、皇国神話などの文章を使い、生活から国への奉仕を重視し、皇国神話は歴史に変わり、天皇への尊敬、忠誠心を唱える教材になっていった。その後、後半になるに従い、軍記物や戦記物などが多く現れた。

台湾事情の教材は、生徒の卒業後の仕事を認識できる工夫に加え、南進基地である台湾に必要なとされる新領土事情の中でも南洋関係の教材により日本の南方統治の成功や軍隊の威勢を宣伝する役割を担っていた。

1941年から公教育は国民学校に改名された。その中で用いられた教科には、「皇民錬成という大前提」を前に、大黒柱となったのが皇国民精神、軍事教材や新領地事情であった。同年、皇民奉公会の設立や大東亜戦争の勃発に伴い、台湾が背負う「興亜」の責任がさらに大きくなった。そのことにより、国語読本の編纂方針にも皇民教材の取り入れや皇国民錬成の徹底が明示されていた。

国語教科書の中にある3種類の教材、すなわち皇国民精神、軍事教材、新領地事情等の教材の目標が、「皇民奉公を徹底させよう」という目標に努めることになっていた。ほぼ半数の割合で、この3種類が構成されていたのである。

皇国民教材の変化として注目に値するのが、台湾の人物が主役となる教材「呉鳳」と「鄭成功」の代わりに、「君が代少年」と「サヨンの鐘」という台湾少年の「植民統治の神話」を採用したことであった。

（3）「君が代少年」の象徴すること

筆者は、教職科目「教育史」を担当していたことがある。その当時、教材を探す過程で、この「君が代少年」に出会い、ショックを受けた。なぜなら、そこには皇国民としての思想教育、あるいは洗脳の意図を強く感じたからである。

資料1で教材化された読み物を紹介するが、その前に教材の前史とも言える背景を述べる。1935年4月21日、台湾中部で発生した地震は、3000人以上の死者を出す大きな被害をもたらした。この年、台湾は日本の植民地となっており、ちょうど40年が経っていた。統治40周年を記念する博覧会を同年秋に計画していた台湾総督府は、直ちに復興委員会を設置する。被災者に対する救済措置は恩恵に過ぎないものとされ、「自力更生」を復興に向けた基本方針とした。大規模震災に打ちひしがれ動揺する人々に自力更生を内面化させる道具として着目されたのが、いわゆる「震災美談」である。

台湾総督府は震災発生からわずか20日後、あわただしく『震災美談集』を刊行したという。それにまとめられた美談には、困難があっても文句を言わず黙々と働く者、時には命を投げ出しても職務に準じた者たちの行いを見習うことを期待する要素が色濃く存在していた。その中でも強く宣伝されたのが、わずか10歳でこの世を去った「君が代少年」詹徳坤（せんとかん）の物語である。

表1 国語教科書の教材分類表⁽⁸⁾

分類項目	分類基準
道徳教材	特性、勉学、親孝行、友情、礼儀、善悪などの観念を教える教材。
実学教材	科学知識、生活知識、地理、経済、衛生、保健、医薬に関する教材。
皇国民精神	日本伝統と国民精神に関する教材。国威宣揚、皇国歴史、伝統行事、神話などを含める。
軍事教材	戦争に関する教材。国家戦力と武器の紹介、戦記物などを含める。
内地事情	当時日本内地風景や特有の事物に関する教材。
台湾事情	当時台湾の風景や特有の事物に関する教材。
新領土事情	植民地台湾以外の占領地に関する教材。

資料1 国定教科書の事例：『初等科国語・三』⁽⁹⁾ 以下全文 表記は当時のもの
「君が代少年」

昭和十年四月二十一日の朝、台湾で大きな地震がありました。

公学校の三年生であったという徳坤少年は、けさも目がさめると、顔を洗ってから、うやうやしく神だなに向って、拝礼をしました。神だなには、皇大神宮の大庖がおまつりしてあるのです。

それから、まもなく朝の御飯になるので、少年は、その時外へ出てゐた父を呼びに行きました。

家を出て少し行った時、「ゴー。」と恐しい音がして、地面も、まはりの家も、ぐらぐらと動きました。「地震だ。」と、少年は思ひました。そのとたん、少年のからだの上へ、そばの建物の土角がくづれて来ました。土角といふのは、粘土を固めて作った煉瓦のやうなものです。

父や、近所の人たちがかけつけた時、少年は、頭と足に大けがをして、道ばたに倒れてゐました。それでも父の姿を見ると、少年は、自分の苦しいことは一口もいはないで、

「おかあさんは、大丈夫でせうね。」

といひました。

少年の傷は思ったよりも重く、その日の午後、かりに作られた治療所で手術を受けました。このつらい手当の最中にも、少年は、決して台湾語を口に出しませんでした。日本人は国語を使ふものだと、学校で教へられてから、徳坤は、どんなに不自由でも、国語を使い通して来たのです。

徳坤は、しきりに学校のことをいひました。先生の名を呼びました。また、友だちの名を呼びました。 ちやうどそのころ、学校には、何百人といふけが人が運ばれて、先生たちは、目がまはるほどいそがしかったのですが、徳坤が重いけがをしたと聞かれて、代りあつて見まひに来られました。

徳坤は、涙を流して喜びました。

「先生、ぼく、早くなほって、学校へ行きたいのです。」

と、徳坤はいひました。「さうだ。早く元気になって、学校へ出るのですよ。」

と、先生もはげますやうにいはいれましたが、しかし、この重い傷ではどうなるであらうかと、先生は、徳坤がかはいさうでたまりませんでした。

少年は、あくる日の昼ごろ、父と母と、受持の先生にまもられて、遠くの町にある医院へ送られて行きました。

その夜、つかれて、うとうとしてゐた徳坤が、夜明近くなって、ぱちりと目をあけました。さうして、そばにゐた父に、

「おとうさん、先生はいらっしゃらないの。もう一度、先生におあひしたいなあ。」

といひました。これっきり、自分は、遠いところへ行くのだと感じたのかも知れません。

それからしばらくして、少年はいひました。

「おとうさん、ぼく、君が代を歌ひます。」

少年は、ちょっと目をつぶって、何か考へてゐるやうでしたが、やがて息を深く吸って、静かに歌ひだしました。

きみがよは

ちよに

やちよに

徳坤が心をこめて歌ふ声は、同じ病室にゐる人たちの心に、しみこむやうに聞こえました。

さざれ

いしの

小さいながら、はっきりと歌はつづいて行きます。あちこちに、すすり泣きの声が起りました。

いはとなりて

こけの

むすまで

終りに近くなると、声はだんだん細くなりました。でも、最後まで、りつぱに歌ひ通しました。

君が代を歌ひ終った徳坤は、その朝、父と、母と、人々の涙にみまもられながら、やすらかに長い眠りにつきました。

震災美談であれ軍国美談であれ、いわゆる美談、すなわち、現実（＝歴史）を国家に有為な人材の育成という政策目的に沿って加工した物語⁽¹⁰⁾は、教材の中に少なくなかった。この「君が代少年」については、「台湾日日新報」に「君が代を歌って震災に散った詹少年」を書いた柴山武矩が、台湾神職会発行の『敬神』でも同様な内容を執筆していた。そこには囲み記事で、地域の有志と学校の職員が記念碑の建立を計画して基金を募ったところ、総督府の文教局長も寄付をすることになった、詹徳坤の善行を教科書にという声が湧き起っている、と報じられていた。その後、『震災美談 君が代少年』のパンフレットが原典として『初等国語三』の教材になったのである⁽¹¹⁾。

さらに、台湾総督府文教局長の序文があった。その序文には、『君が代少年』を「公館公学校三年生詹徳坤君が、去年の地震に瀕死の重傷を負ひ、然もその臨終に国歌『君が代』を奉唱したいといふ、誠にいたいけな可憐な物語」と紹介し、「全く純粋の日本少年になり切った詹徳坤君」は、「無間の尊い教へを、軌範を、台湾の多くの青少年の心の奥底に刻みつけた」「これに刺戟され、奮い立って、近き将来に詹徳坤の如き、否詹徳坤君に負けない程の、国粹精神をもった人がこの世に現はるることを、我々の期待してゐる事は勿論であるが、徳坤君の小さな靈魂も何よりそれを待ち望んでいる居るのではないだろうか。」と書いている。教科書よりも長いページ数となっているようだ。

教科書では、君が代を歌って息を引き取るところで終わっているが、こちらは死後も続いていて、台湾全島だけでなく内地からも寄付が寄せられ、台南在住の浅岡という彫刻家が銅像をつくり、一周忌である昭和11年4月23日に、知事などの来賓と両親を迎えて除幕式が行われたとされる。そして銅像の台座に刻まれたのは、柴山武矩の撰文を引用して結んである。

負傷した徳坤が会いたいと呼び続けた教師には、「校長先生と大岩先生」の二人の名が挙げられている。そして銅像の台座に刻まれたのは、柴山武矩の撰文を引用して結んである。

2.4 台湾が歩んだ教育上の軌跡

現代の台湾から遡る形で、台湾での教育の歴史を概観してきた。筆者が慈済でSLHTPを受講した関係から、その教育内容を記述し、これを出発点としたが、考察するには特殊であるかもしれない。

しかしながら、日本統治下の「かつて日本人だっ

た」人々への日本人としてのアイデンティティを植えつける教育に対し、統治者の日本人たちが敗戦によって台湾を去ってからの激動の時代、台湾は戒厳令下に置かれ、その解除後に民主化、開放政策の下に現在の教育体制が築かれて、そんなに長くない。

中国では中華民国の政権党であった国民党と共産党との内戦勃発、内戦に敗残した中華民国政府は、蒋介石を始めとした多くの政治家や官僚、軍隊が台湾に逃れ、台北を首都として台湾に中華民国の政権を樹立した。それまでの日本色を廃するため、日本による同化政策で使われていた日本語は禁止され、学校では徹底した反日教育、政治的には戒厳令を発令して独裁的で強権的な政権へとなった。それは、1987年の戒厳令解除まで続いた。

そんな経緯を踏まえ、慈済が提供した学習プログラムには、台湾文化を学ぶ場面はあっても、多文化、多民族を踏まえた社会で互いに敬意を払って、働くことの重要性を前面に押し出しているように、考えることができる。

3 台湾映画が示唆するもの

映画は社会を映し出す鏡、と言われることがある。どんな映画にも、その社会のあるところ納得できる社会環境、自然環境がある。映画と耳にすると、映画産業で名高い米国のハリウッドを思い浮かべられるだろう。

しかし、現代では映画はさまざまな地域で制作されている。台湾のことが知りたいのなら、まずは台湾映画を観ると、台湾を知るためのヒントがたくさん存在していることに気づかされる。台湾に限らず、各地域のことが知りたければ同様な試みをしてみると、知りたいことに手が届きやすくなるのである。

3.1 台湾映画との出会い

筆者が初めて台湾映画と認識した作品は、ホウ・シャオシエン（侯孝賢）監督の『悲情城市』で、1990年代ごろビデオ鑑賞で、台湾の抱える歴史を知ることとなった。その頃は、台湾ニューシネマの時代に位置づけられ多くの作品が世界で認められた時代であったという。台湾は政治的な理由により、これより前の映画は検閲が激しかった。そのため表現の自由には残念ながら制限があった。しかしそれを変えたのは本作品であると言われている。この映画は台湾映画界の中でも、傑作だと知られ未だに多くの人にとって語り草になっている。

時代は日本統治終了の1945年から1949年の中華民国建国までの4年間。この激動の時代を生きた林家の家族を描いた作品で、耳の聞こえない四男を主に描く。この四男をトニー・レオン（香港の人気俳優で四天王のひとりとされるだけでなく、演技派俳優とされている）が演じ、話題になった。

時代背景をリアルにかつ大胆に作り込むことで、ドキュメンタリーのような作風で仕上げられた。エンターテインメント性はかなりうすく、感動して号泣することもなければ、感嘆の声もない。あるがままの台湾の姿をできるだけ人に伝えるべく制作された映画、まさにそんな作品である。

ハリウッド映画のような華やかなものが好みの人には観るのも辛いかもしれないが、静寂の中に揺るぎない意思や歴史を詰め込んだ時代映画であった。

3.2 日台関係を表現した映画

国片ブームという現象が、2007年から2010年にかけて台湾社会で盛り上がったという⁽¹³⁾。国片というのは自国産という意で、まさに台湾映画と同義である。そのブームの中で観客の心をとらえたのは、「台湾」をテーマとしていたところである。アプローチはそれぞれ違っているが、制作者たちの表現方向は、「台湾」に向けられていたのである。

台湾では、ここ20年ほど「台湾本土化」と呼ばれる状況が続いている。

第2次大戦後の台湾では中華民国政府の全中国を代表する政府というイデオロギーのもとで、大陸から持ち込まれた政治、社会制度などがそのまま用いられてきた。これら制度を台湾の実情に則したものに改めていくことが、すなわち民主化、台湾化であったが、90年代後半頃から「本土化」と呼ばれるようになった。そこには台湾は台湾を本土として生きていくという住民の民意を主体とした行政理念がある⁽¹⁴⁾。

それは国民党＝中華民国が全中国を代表し、いつか大陸への併合を実現するというイデオロギーの下にあったが、その中では、台湾はあくまでも辺境にある省のひとつに過ぎず、台湾自体に敬意が払われることはなかった。

しかし、民主化が進み、政治的な束縛から解放された人々の間に「一つの台湾、一つの中国＝台湾は台湾、中国は中国」というアイデンティティが強まっていくに従い、台湾への情感を自由に表現し、台湾を唯一無二の郷土であると考え方向に変化を

遂げてきたのである。

前項であげたホウ・シャオシエン監督の『悲情城市』のように、台湾映画は台湾ニューシネマと呼ばれる新ジャンルとして世界に注目されたが、台湾人の心情をとらえる映画作品には成り得ていなかった。

それを大きく変えたのが、『海角七号 君想う、国境の南』（以下『海角7号』）という2008年の作品であった。爆発的なヒットをとばした。この映画の最大の魅力は日本統治下にある台湾人と日本人とのラブストーリーを軸に、現代の若者たちと音楽活動を絡めた一見複雑にも思えるストーリー構成である。

本作品は日本統治下の台湾と、現代の台湾が舞台である。全体を通して二か国の歴史を避けて通ることができず、きれいにまとめられている。全体的にリアルな描写が特徴である。このありのままに近い描き方が台湾にいる当時生きていた多くの人に共感を得ているのかもしれない。また、日本との絆を描いたものであるからと、俳優にも日本人が起用されていることも効果的であった。

過去と現代を交差することで、より過去の人間の哀愁と贖罪のようなものを強調しているようにも思えるだけでなく、劇中に現代と過去に登場する日本人女性が偶然同じ名前であったので、手紙がダブって聞こえるのも巧みな演出となっている。

『海角七号』を撮影したウェイ・ダーシェン（魏徳聖）監督は、台湾歴代最高のヒットとなり、いわゆる国片ブームを盛り立てる役目を果たしている。その後も、ウェイ監督は台湾と日本との関係をテーマとし、特に日本統治時代を扱って作品を撮り続けている。『海角7号』後は、上下合わせて4時間半という上映時間で、制作費も8億台湾ドルという大作『セデック・バレ 太陽旗』『セデック・バレ 虹の橋』の二部作を2011年発表し、これも大ヒット。

さらに、2014年には総合プロデューサーとして『KANO～1931 海の向こうの甲子園』を発表した。

改めて、ここでウェイ監督作品の内容について述べたい。『海角7号』は、まず現代の話として、台北から逃げ出した若手のボーカリストの阿嘉が、台南最南端の屏東兼の恒春という町で新しい音楽仲間や日本人女性「友子」と出会い、再起する物語である。もう一方のサイドストーリーとして、日本統治時代に将来を誓っていた日本人男性と「友子」という台湾人女性が日本の敗戦による台湾の放棄で別れを余儀なくされたことも、阿嘉らの物語と並行して描かれる。

「海角 7 号」はその時代の女性が住んでいた住所のことで、その住所に亡くなる前の男性から七通の手紙が届く。地元での音楽祭が成功を収めて阿嘉と友子が結ばれ、手紙がもう一人の「友子」に届けられることで二つの物語はシンクロするのである。

次に『セデック・バレ』である。この映画の素材は日本統治時代に起きた「霧社事件」である。1930 年、台湾の山間地にある霧社（現在の南投県）で起きた先住民による大規模な抗日暴動である。霧社は川の上流にあり、いつも霧に覆われていることから名づけられた地名とされる。

セデックとは、台湾中部の山岳地帯に住み、虹を信仰する誇り高き狩猟族であり、山深い大地と共存し、周囲の動植物と調和を保ちながら生きていた、という⁽¹⁵⁾。彼らは野蛮人と扱われながらも、日本人として生きるように教育された。日本の文化を学び、独自の文化や風習は禁じられ、さらには過酷な労働と服従を強いられて、日本統治が 35 年目を迎えた。

セデック族マヘボ社（村）の頭目、モーナ・ルダオをリーダーとした 6 社約 300 人が霧社公学校で行われていた運動会を襲撃し、日本人のみ約 140 人を殺害した。セデック族でありながら日本の警察官になった花岡一郎、二郎とその妻たち、霧社の日本人警察官、佐塚愛祐とセデック族の妻との間に生まれ、日本で歌手になった長女の佐和子、行方不明だったルダオの遺体が霧社に安置されるまでのいきさつなどが描かれていく。

セデック族の勇猛な頭目であるモーナ・ルダオが、日本人によって伝統的で平穏な背活が奪われていくことに耐えられず、仲間を率いて蜂起する。彼は先住民 300 人を率い、日本人の学校の運動会に乱入し、約 140 人の老若男女問わず日本人を殺害した後、山地に立てこもり投入された日本軍とたたかったが、その後は日本軍の武力を前に鎮圧された。モーナ・ルダオは家族を殺し、自ら山に入って自決したとみられている。

『セデック・バレ』では抗日事件をクローズアップしすぎると、本来の問題点は見えてこない。映画では、日本人と原住民族との文化や慣習の違いから摩擦があったことが描かれる。「セデック・バレの真実」の中でも、佐塚愛祐のおい、昌人さんが「（セデック族の）儀礼を無視して日本の常識を押しつけたことが事件の一番の原因だ」と指摘している。『セデック・バレ』では「異民族同士が衝突することは避け

られない。日本とセデック族の場合もそうだった。大切なのは、その後お互いを理解することだ」とウェイ監督が言っていたようだ。

監督は、日本への抵抗を主題として、この映画を制作しているが、「歴史を決して善悪からは描かない」という立場を貫こうとしているようだ。

3.3 台湾人と日本人

ウェイ監督は『セデック・バレ』を作ろうと思った理由について、小中学校の教科書を持ち出した。この点については、映画のパンフレットにも書かれているエピソードなので、引用して紹介したい⁽¹⁶⁾。

「霧社事件に関しては小中学校の教科書に記述があるので、そういった事件があることは知っていました。ある時、台北で東部の原住民たちが国に対して「自分たちの土地を返せ」というデモを行っているのに遭遇して興味をもち、原住民のことを調べてみようと思って、霧社事件に関する漫画を書店で見つけました。学校の教科書には 2~3 行しか記述がなかったのに、その事件の背景にはいろいろな事柄があることに驚き、さらに調べてみたいと思ったのです。

これは絶対映画にしなくてはと脚本に取り掛かりましたが、そこで台湾と日本の歴史の中で誰が善人で誰が悪人なのか、わからなくなっていました。拍手喝采もできなければ涙を流すこともできず、自分の立場はどこなのか、どう描いていいのか悩んでしまった。そして、広い視野でこの霧社事件をとらえようと決めました。それは、文化と信仰の衝突という描き方です。太陽と虹をそれぞれの信仰する者たちが山の中でぶつかったという描き方ならできると思いました。」

筆者は、この映画を日本での公開時に映画館で鑑賞している。今回、本稿を作成する直接のきっかけは、引率業務で台湾、花蓮県に滞在したことによるが、そこでの驚きのひとつは原住民の存在であった。

台湾原住民とは、17 世紀初頭に漢民族が中国大陆から台湾に移住し始める以前の大昔から、既に台湾に住んでいた先住民の子孫のことである。アミ族、タイヤル族など台湾の総人口のうち約 1.9%（2001 年現在）存在し、台湾島東部の花蓮近くにはアミ族が多く分布する。他にはタイヤル族、バイワン族など 9 つに分かれている。各種族にはそれぞれの言語

をもち、相互間には言葉が通じない。そこで、日本統治時代には彼ら相互の共通語として日本語が使われた。戦後は、日本語の代わりに北京語を普及させようという政策がとられたが、十分な成果は得られなかったという。

4 台湾人とは誰か

2015年11月8日、中台首脳会談が行われた⁽¹⁷⁾。

中国と台湾は、かつて戦火を交え、互いに正統政権と認めない関係が66年続いている。その首脳同士が初めて会談した。両者がシンガポールに足を運び、相手を先生と呼び、敬意を表して向き合った。これは歴史的な一歩であるとされる。問題は、この雰囲気は今回限りで終わらず、今後も持続できるかどうかということだ。

この雰囲気が今後も持続されることに期待したいところだが、それは、台湾にとって好ましいものであるか。

過 去	共通の文化	5千年の文化
	共通の祖先	黄帝、炎帝
	過去の栄光	漢朝、唐朝、抗日戦の勝利
	過去の苦難	共産党の反乱
	歴史の記憶	八年の抗戦(対日戦争)
現 在	我々は誰か？	中国人
未 来	言語・文化	「国語」、中華文化
	政治的使命	三民主義による中国の統一
	ナショナル・アイデンティティ	中華民国
	教育内容	中華文化、中国史
	象徴・符合	(中華民国の)国旗、民国紀元

たとえば国共両党が同原則を確認したとされる「九二年合意」について、馬氏は「兩岸の平和的發展の政治的基礎」と述べ、習氏もそれを「堅持する」と表明したので、両氏が『一つ中国』確認と報じられた。しかし、その「確認」に大きな問題があった。それについて、台湾の最大野党・民進党の蔡英文主席は、「馬英九総統は会談で、台湾の民主も、自由も、中華民国の存在も、台湾人民が自由を選択する権利も主張せず、大いに失望した」と批判したという。

国民党は「双方は『一つ中国』に同意するが、『一つ中国』の意味はそれぞれが表明する(台湾は「中華民国」と述べ、中国は「中華人民共和国」と述べる)」との合意だったと説明する。

しかも、世界には一つの中国しかなく、台湾は中国の一部であり、中華人民共和国が全中国を代表する唯一の合法政権だ」と強調するから、そのような合意を行うはずがなく、それぞれの主張は「双方が『一つ中国』の原則を堅持することを口頭で表明する」という合意だったのである。

両者は、いかにして解釈の違いを乗り越え、「合意」を確認したのだろうか。実は馬氏は「一つ中国」は口にしても、『一つ中国』の意味はそれぞれが述べ合う」とは主張しなかったとされる。「中華民国」の国名についてもだ。「我が方は『二つの中国』『一つの中国・一つの台湾』『台湾独立』の主張に触れなかった。

台湾は、1996年に李登輝氏が総統に就任して以来、民主化が急速に進んで経済も発展した。台湾人の約80%は「自分は台湾人」と自覚するようになっている。それで、「台湾は中国の一部」との中国側の主張に反発することになる。これでは、「一つ中国」を前提とした中台首脳会談の政治対話は進展しない。

台湾人は、民主化の進んだ証として台湾人のアイデンティティを維持し、中華民国、中華人民共和国という国名を出さなくとも、それぞれの存在を認め合える状態になることこそ、望まれる形だと考える。台湾人とは、中国に統一されることなく、台湾そのものにアイデンティティを感じる人であるからだ。それは、台湾本土化で形成されたものである。

表2の戦後の台湾の教育から導き出した「中国ナショナリズム」に対し、1980年代の社会変動は戒厳令の解除に伴い、民主化運動と相まって、表3のような「台湾人ナショナリズム」、すなわち台湾アイデンティティが醸成されたと考えられる。

過 去	共通の文化	(ヨーロッパによる「発見」以来の) 400年の歴史
	共通の祖先	海を渡ってきた祖先
	過去の栄光	?
	過去の苦難	(スペイン・オランダ・「中国」・日本など) 外来政権による支配
	歴史の記憶	二・二八事件
現 在	我々は誰か？	台湾人
未 来	言語・文化	台湾語、台湾文化
	政治的使命	独立建国
	ナショナル・アイデンティティ	台湾共和国
	教育内容	台湾文化、台湾史
	象徴・符合	新国旗、西暦

5 日台関係の現在～終わりに代えて

2015年5月、同年の8月の後半、2週間という期間に台湾滞在という業務命令を受けて、すぐ脳裏をよぎったのが、台湾人たちの日本受容の度合いについてである。

21世紀になって沸き起こった日本ブームは哈日（ハーリー）族と呼ばれる若者を中心に熱狂的な日本好きを生み出した。日本のドラマが流行の先端という認識の下、日本のイメージがどのように形成されるのかについては、家庭環境の影響の可能性が何度も指摘されてきたようだ⁽²⁰⁾。日本統治時代では「国語＝日本語」教育を受けた日本語世代は、もともと日本語を母語として使用していた先住民諸語を第一言語とし、日本語が第二言語となっている。これらの人々の中には日本語による学校教育を受けた年数や、そこで形成された人間関係等から、日本語に強い思い入れを持つ人々も少なくない。

台湾は多文化・多民族地域であることを考えると、エスニック・アイデンティティと日本語の位置づけを示すような事例研究には、他のコミュニティとのコミュニケーション・ツールとして日本語の選択がある。これは、日本統治時代に培った植民地教育の遺産ということができる。

以上を踏まえると、あまりにも単純化されてしまうことになるが、日本語の位置づけにより日本のイメージ形成があり、その背景に、台湾社会がたどってきた歴史的経緯、あるいは政治的・社会的文脈が関与していることが分かっている。

言語の使用は言語教育とアイデンティティの関係性を考えても密接的に関わっている。

最近、台湾で「懐日映画」が大ヒットしているという⁽²¹⁾。それは、『湾生回家』というドキュメンタリー映画である。「湾生（わんせい）」とは、戦前、台湾で生まれ育った日本人のことを指す。映画の日本語タイトルは、『故郷—湾生帰郷物語』となり、2016年に日本でも公開されるようだ。

戦後70年を経て、「回家（＝帰宅する）」という言葉が示すように、湾生たちは日本に帰った後も、忘れようとして忘れられなかった「台湾＝故郷」に深い感慨とともに戻っていく物語を描く。映画の中では、高齢に達した湾生たちが、それぞれの故郷で懐かしい人々と景色に出会い、台湾への哀惜や戦後の人生を語りつくすところが観どころとなっているようだ。

湾生とは、どのような人々か。敗戦によって日本

は台湾の領有権を放棄し、中華民国政府は日本人を全員、日本に帰す方針を採った。1949年までに日本人の帰還事業は完了した。当時、台湾から引き揚げた日本人は軍民あわせて50万人と言われている。台湾生まれでなくても、台湾で長期にわたって少年期や青年期を過ごした人々も湾生である。

台湾の日本ブームと湾生の存在、台日はお互いに歴史の中で忘却の関係にあったように錯覚しながら、実は互いの記憶の中で互いの想いを寄せ合っていたように思われる。

近年の台湾では、「中国は中国、台湾は台湾」という認識が完全に定着し、郷土へ向ける愛情が強調されている。それに、湾生が加わり、日本人も愛する台湾というところにも、目が行く。立場は違うが同じ歴史を共有する関係で、今後もアイデンティティとして台湾人は日本を、日本人は台湾を意識していくという図式が存在し続けるのだろう。

注

- (1) 2015年11月1日より慈濟科技大学となった。
- (2) 「慈濟基金会の概要について」（閲覧日 2015年12月1日）
http://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com_content&view=article&id=485&Itemid=198
- (3) 「筑波大学人間学群 サービス・ラーニング」
www.human.tsukuba.ac.jp/gakubun_bk/k-pro/aboutSL/aboutSL.html 筑波大学 HP、閲覧日（2014年11月25日）、天野竹行、岩本光一郎、小林慎太郎、内藤遥、南里幸、堀田泰治、松岡崇暢、三輪昭子「サービス・ラーニングが学生に与える影響についての報告」『地域デザイン総合研究所 紀要』2014年、pp54 - 56 参照。
- (4) 村島健司「台湾における生の保障と宗教—慈済会による社会的支援を中心に—」『社会学部紀要 第114号』関西学院大学、2012年、pp214 - 215 参照。
- (5) 「詳細な年表でたどる、台湾の歴史」黒羽夏彦。『pen+ 台湾カルチャー・クルーズ』CCCメディアハウス、2015年、pp.104 - 105
- (6) 林初梅『「郷土」としての台湾—郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』東信堂、2009年。
- (7) 陳虹彪「日本統治下台湾における初等学校国語教科書の考察—1937年以降台湾人生徒の国語教科書に着目して—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第54集・第1号、2005年によると、次のような例が示されている。すなわち、長い編み髪で清朝風の台湾式服装を着る台湾人や日本小学校制服を着る子どもがともに挿絵に現れ、汚い恰好で悪いことをする台湾人の子どもに対し、日本人の子どもはいつも礼儀正

しくまじめな役で登場する。そんな区別があった。

- (8) 村上正彦『「君が代少年」を探して』平凡社新書、2002年、p32に筆者の定義があり、それに類するものとして、例えば日露戦争を勝利に導いた東郷平八郎や、死んでもラッパを離さなかった木口小平の逸話があるとしている。
- (9) 「『君が代少年』という国定教科書の文章」
blog.livedoor.jp/ekesete1/archives/45196434.html
(閲覧日 2015年12月8日)、文章内の旧仮名遣いは出典の文章のままとした。
- (10) 『「君が代少年」を探して』平凡社新書、2002年、p122～124。以下の段落で、「君が代少年」に関わる内容は、本書を参考とした。
- (11) 「詳細な年表でたどる、台湾の歴史」黒羽夏彦。『pen+台湾カルチャー・クルーズ』CCCメディアハウス、2015年、pp.104 - 105
- (12) 小林重雄『「台湾本土化」が進む台湾』日本総研、RIM環太平洋ビジネス情報 2000年10月 No.51
<https://www.jri.co.jp/page.jsp?id=15783>
(閲覧日 2015年12月7日)
- (13) 菅野敦志「台湾における『本土化』と言語政策—単一言語主義から郷土言語教育へ—」『アジア太平洋討究』No.12、2009年、pp225 参照
- (14) 野嶋剛『認識・TAIWAN・電影 映画で知る台湾』、明石書店、2015年、p21 参照。
- (15) マクザム、太秦編集『セデック・バレ 映画パンフレット』株式会社マクザム、2011年、p5 参照。
- (16) マクザム、太秦編集『セデック・バレ 映画パンフレット』株式会社マクザム、2011年、p11 参照。
- (17) 「対話の進展見通せず」2015年11月8日付け朝刊、中日新聞。
- (18) 山崎直也「台湾における教育改革と『教育本土化』—「国家認同」と公教育をめぐる政治—」『国際教育』第8号、財団法人 交流協会、2002年、pp27、出典は王甫昌「台湾反對運動的共識動員：1979年—1989年兩次挑戰高峰的比較」『台灣政治學刊』創刊号、1996年、146頁の図1で、作成は山崎氏となっている。
- (19) 山崎直也「台湾における教育改革と『教育本土化』—「国家認同」と公教育をめぐる政治—」『国際教育』第8号、財団法人 交流協会、2002年、pp27、出典は王甫昌「台湾反對運動的共識動員：1979年—1989年兩次挑戰高峰的比較」『台灣政治學刊』創刊号、1996年、146頁の図1で、作成は山崎氏となっている。
- (20) 加賀美常見代『アジア諸国の子ども・若者は日本をどのようにみているか—韓国・台湾における歴史・文化・生活に見る日本イメージ』明石書店、pp104～106 参照。
- (21) 野嶋剛「今なぜ台湾で『懷日映画』が大ヒットするのか」
東洋経済 online、<http://toyokeizai.net/articles/94829>、
(閲覧日 2015年12月1日)

引用文献

- 野嶋剛『認識・TAIWAN・電影 映画で知る台湾』、明石書店、2015年
- 村島健司「台湾における生の保障と宗教—慈済会による社会的支援を中心に—」『社会学部紀要 第114号』関西学院大学、2012年
- 陳虹彪「日本統治下台湾における初等学校国語教科書の考察—1937年以降台湾人生徒の国語教科書に着目して—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第54集・第1号、2005年
- 村上正彦『「君が代少年」を探して』平凡社新書、2002年
- 山崎直也「台湾における教育改革と『教育本土化』—「国家認同」と公教育をめぐる政治—」『国際教育』第8号、財団法人 交流協会、2002年
- 菅野敦志「台湾における『本土化』と言語政策—単一言語主義から郷土言語教育へ—」『アジア太平洋討究』No.12、2009年

(原稿受理年月日 2015年12月9日)